

## サツマイモの伝来－前田利右衛門と青木昆陽－

焼酎やデンプン、お菓子の原材料として身近なサツマイモ(唐芋)ですが、どこからどのように伝わってきたのでしょうか。もともとは、原産地はメキシコやペルーなどの中南米とも言われ、ここから、大航海時代にコロンブスがヨーロッパに持ち帰るなど、様々なルートで地球上に広がりました。

日本には約 400 年前(1604 年、江戸時代)、中国福建省から琉球王国に伝わり、それから現在の鹿児島県に伝わりました。唐芋とは「中国から来た芋」を意味する、との説もありますが、日本に伝来した江戸時代には、唐(から)とは外国を表しており、唐芋とは「外国から来た芋」を意味する、との説もあります。

琉球から鹿児島への伝来のルートとしては、奄美大島へのルート(1623)のほか、県本土へのルートとして、①島津家久の琉球出兵の際に兵士が持ち帰った(1611)、②種子島島主の種子島久基が琉球王尚貞より取り寄せた(1698)、③薩摩山川の漁師である前田利右衛門が琉球より持ち帰った(1705)、の3つのルートがあるとされています。

県内にはサツマイモ(唐芋)の伝来や功績を称える碑や遺跡も多く、シラス台地の広がる鹿屋市串良町では、前田利右衛門がサツマイモ(唐芋)を普及させた恩に感謝して「利右衛門の供養碑」が立てられています。また、彼の生まれた指宿市山川、鹿児島市吉野町の史蹟を見ても、彼がその普及に大きな役割を果たしたことが分かります。(ただし、一漁師である彼が行政の力なく普及させたとは考えにくいため、後に島津藩の家老となり農政担当となった種子島久基が前田利右衛門の名で普及させた、との説もあります)

このようにして伝えられたサツマイモ(唐芋)が、土壌・水利条件に恵まれない鹿児島で広く栽培されるようになりました。



前田利右衛門の供養碑(鹿屋市串良町下中)

江戸時代には享保の飢饉(1732)、天明の飢饉(1782 ~ 1787)、天保の飢饉(1833 ~ 1839)の三大飢饉が起こりました。これらの飢饉で全国の多くの人が飢餓に苦しみましたが、鹿児島ではその時既にサツマイモ(唐芋)は普及定着していたと推測され、餓死者はいなかったと言われています。

こうした中、江戸日本橋生まれの蘭学者青木昆陽は、京都で学問に励む傍ら、書物により甘藷が救荒作物として重要であることを知りました。江戸に帰り、甘藷栽培の効用を説き、これを救荒食とすべきことを八代将軍徳川吉宗に上書、それが認められて、馬加村(現千葉市幕張町)、江戸小石川の養生園(現小石川植物園)、上総豊海不動堂(現山武郡九十九里町)が甘藷試作地とされました。そして、その栽培方法を学び、「サツマイモ(薩摩芋)」の名で江戸へ伝えました(1734)。

サツマイモ(唐芋)を琉球から薩摩へ伝えた前田利右衛門は甘藷翁とも称され、生誕の地指宿市山川には彼を祀った「徳光神社」が建立されています。また江戸にサツマイモ(薩摩芋)を伝えた青木昆陽も芋神様として千葉市京成幕張駅近くの「昆陽神社」に祀られています。



利右衛門を祀った徳光神社(指宿市山川岡見ヶ水)  
おかちよがみず

#### 参考文献等

- ・ 広報かのや NO.123 (H23.2.10、鹿屋市役所)
- ・ 鹿児島のさつまいもの変遷と活用(鹿児島純心女子短期大学研究紀要第 37 号 2007、新藤智子他)
- ・ フェスティバルパンフレット
- ・ 徳光神社現地看板